

# 林 慧仙

LIN, Hui hsieh

## インターカルチュラルコラボレーション

Intercultural collaboration

### はじめに

現代の科学技術のなかで、特にインターネットの交流がどんどん発展したことを基に、グローバル化の時代がもたらした国際交流のレベルは、前の時代よりさらに緻密になり、国際的なコラボレーションと交流機会も前よりどんどん増えて来て、その実際は前より複雑になった。この二十数年間日本でも様々な海外公演の舞台を上演した、そこで演劇は、人の心理や感情的な国民性と深くかかわっている文化的、芸術的な特徴を持っているし、さらにはテキストとコミュニケーションのための言葉話す能力で成り立っている、単に外国作品として鑑賞することから、国と国、外国人と外国人のコラボレーションの形式へと進化して来た。この論文の主眼は、インターカルチュラルな作品自体の芸術表現の分析ではなく、その創作過程に起こる様々な問題を探求することに置きたいと考えます。創作の現場で、その異文化がお互いにぶつかり合う瞬間、第一にはお互い喋る言葉が分からなくなった時は、演劇の創作はどうやって追求して行くのだろう。つまり異文化環境の下で演劇創作の実践を試みる現場を再経験することで、インターカルチュラルなコラボレーションの現場で演出の可能性を追求したいです。

### 第一章 インターカルチュラルコラボレーションについて

日本の異文化コミュニケーションの研究者浜名恵美教授は自分の著書『文化と文化をつなぐ』の中で、異文化認識のためのインターカルチュラル・パフォーマンスに向けて、こういう概念を説明した：

インターカルチュラル・パフォーマンスとは、ある文化と他の文化の相互作用から生じる創造的な実践である<sup>1</sup>

この種のパフォーマンスがもっている別の力に注目し、それを探求して行きたい。すなわち、(異)文化認識(intercultural awareness) —— 他者や異なる文化の存在に気づくこと、またその気づきをととして(それら自体が決して自明なものではない)自己や自文化を見つめなおすこと —— の瞬間をもたらす力であり、ある文化と他の文

化がつながる瞬間と、それらがつながり変容する瞬間をつくりだす力である。<sup>2</sup>

ここで指している「相互作用」と「異なる文化の存在に気づくこと」の意味は片手で一つ文化を主体にする事ではなくて、全部関わっている文化の成員がお互いに舞台を作る過程の中で、交流や対話の色々な形を通して、お互いのアイデアを重ねて、意見を交換して、一緒に作品を作るという意識を持つ事ではないでしょうか。勿論、インターカルチュラル・パフォーマンスとインターカルチュラルコラボレーションは違う事ですが、しかし共通点は二つの活動内容は同じインターカルチュラルの性格を持っているので、インターカルチュラルの状況に入ると、こういう意識を必要な態度ではないでしょうか。

### 第二章 別役戯曲からインターカルチュラルコラボレーションの舞台へ

別役実の戯曲『トイレはこちら』は私が初めて読んだ日本の演劇の台本だ。この戯曲は二十五年前に書いた短編作品だが、しかし今の時代読んでも全然違和感がなくて、とても読みやすいと感じられました。その不条理の内容と別役実特有のユーモアは本当に味わう事ができて、読むと止まらない気がしました。そこで、今回の論文のインターカルチュラルコラボレーションの舞台は別役戯曲の『トイレはこちら』を使って舞台を作ることになりました。外国人の立場である私は、自分と全然違う文化と環境で、違う言葉で書いた戯曲を芝居を作るのは大変な事かもしれないですが、しかし私にとってやりたい所はどうやって忠実に元々別役のスタイルと日本の文化を合うように見せる事ではなくて、どうやってこの別役戯曲が最初に台湾の家の隅に読んだ外国人の私を与えられた魅力を日本で再現する事である。

### 第三章 私の実験、私の舞台

別役実とは日本の不条理演劇を確立した第一人者であり、彼の作品時代の挑戦を越えて未だ学生からプロの劇団まで、沢山の劇団が再演されている。彼の作品の文体でも、舞台の

形式でも、劇の要素例えば「電信柱のある演劇」や「非日常性を示す事」や、「犯罪の構造」等の別役戯曲の特徴は、これらは全部彼のクラシックな印象であり、別役戯曲の魅力の源泉と思います。

『トイレはこちら』は元々二人の会話劇の形で、男と女の会話は不条理のロジックの中にずっと回って行って、台詞と台詞の間に不条理の怪しい事態や、言葉遊びみたいな面白さがだんだんにそこから生み出して、物語の会話自体もある程度に非日常性の特徴も少しずつ出て来る。一方、元々の物語の視覚的な空間設定と服装等の要素は会話の本質と違って、とても現実性がある写実な舞台にした。そうすると全体的にその見えない台詞の「非日常性」と見える空間や実物の「現実性」を対比すると、ある矛盾感と皮肉感はこの中に出て来るのではないのでしょうか。

別役戯曲が持っているこの非日常性をもたらした台詞の曖昧の抽象性と舞台等視覚的要素の現実性に対して、私はやってみたいのは簡単に言えば、この二つ特徴を逆転する事です。原作と逆の概念で再構成して、それで元々の物語で感じた皮肉さを表現したい。その逆の概念はつまり、原作の現実性を持つて視覚的の舞台要素を取り除く、舞台上に見える物は全部抽象の形で表現する。一方、台詞を改編する事で、二人芝居から三人芝居になって、ある程度に原作元々の「非日常性」をなくして、つまり物語の中の関係性は同じ男と女の会話の形で見えるようだが、人形と女の関係性を増やすので、この物語の人間関係を複雑にする、そして観客に物語への想像と自殺する動機など因果関係と曖昧的な日常想像を広げる事ができる事で、逆の概念で原作の皮肉さを表現する事は今回の演出の狙いです。

### 終わりに

インターカルチュラルのコラボレーションの舞台は、その舞台の中に全部関わっている各種の文化に対して、それぞれの文化や特色等が発揮できる、対話できる機会は同じ自由さで、同じ空間や時間で公平的(平均的)に得る事は難しい事ですが、それはインターカルチャーの舞台にとって、劇作家、演出家、役者、舞台デザイン、服装デザイン等創作面の方は自分が所属する文化をどうやって交流する、対話する事に関してバランスを取る事だけではなくて、公演に関して実際に執行する制作面の環境や参加するスタッフの事、例えば国籍や、公演の場所と国や、観客の言葉等いろんな要素もインターカルチャーの舞台が最後にその成果が表した文化感覚やスタイル等総合的な主体性を表現すものを左右する理由と思いますが、しかし、インターカルチュラルのコラボレーションの舞台が一番貴重な所は最後公演する作品自体ではないと思います。一番注目すべき物はやはり異文化の間に一緒に呼吸(コンセンサス)を作る過程だと思います。その関わっている全員の各方面例えば制作面や演技や演出方法等の交流でも、話し合っても、ぶつかり合い等色々な文化による直接的

な反応や感情を感じる瞬間に、異文化の違う物だからこそもたらした自分或は自文化を再発見する事はインターカルチュラルのコラボレーションの一番宝物ではないのでしょうか。

1. 浜名恵美、『文化と文化をつなぐ——シェイクスピアから現代アジア演劇まで』筑波大学出版会、1、2012.
2. 同上、2、2012.



トイレはこちら  
The toilet is here  
舞台の記録映像  
Record of the play / Blu-ray  
60 min.

## 高橋 芙実

TAKAHASHI, Fumi

### からっぽな身体

On the empty body

私はあることを思う。

偶然なんてありえない。そのような観念をつくったのは人間であるわけで、すべては必然でできている。この世に生をうけたときから何もかも決まっている。たとえば何か選択を迫られたとき、自分がどれだけ悩んで決めたことでもそうなることは決まっているのだ。ひたすらループし続けている。風の吹き方、植物の成長、水の流れ方、波の動き、すべて決まっていて法則がある。この生きているという事は無だ。しかし希望とかがまったくない訳ではない。未来と過去が生じたときにそれはなくなるわけで、今、現在、その瞬間は何が起きるかわからないからそういう感情を持てるのである。時計を見たり、動植物が枯れていったり、

体の衰えを感じたりなどの時間の流れを感じたときモノクロとカラーが交わり世界は鮮やかに見えているのだと思う。その大事な瞬間を逃さず捕まえるために踊っている。

表現の究極をいえば、何もせずただ身体一つあればよい。しかしそれは、自分の世界と外の世界を融合できるかによってくる。すべてを受け入れ一度混沌とした状態になり、そしてすべてを放出しそれまでの経験を整理するのだ。身体へ直接ぶつかることで人間の本来の姿が現れ、自己を再認識することができる。そのためにはいかにからっぽでいられるかが重要になる。つまり私は身体に対して無限の可能性しか感じていないのだ。



フネヲオモウ  
A boat floating on my mind  
パフォーマンス時の様子  
(2016年1月17日)

# 丸れいな

MARU, Reina

## コンスタンチン・スタニスラフスキーの身体的行動の方法論

スタニスラフスキーシステムの演技法から俳優の身体と心情をめぐって

Methodology of the physical behavior by Konstantin Stanislavsky

On the body and the feelings of the actors from the acting methods of the Stanislavsky system

スタニスラフスキーシステムとは、スタニスラフスキーによって生涯を通して研究され、生みだされた演技法でわざとらしい作り物の演技を排し、より現実に近い自然な演技についての方法論だ。

それは、俳優の想像力を呼び起こし俳優自身が過去に体験した似たような経験から、作品が求めている状況を的確に表現する為に、そうした状況や人物像を自分自身の感情や感覚に置き換えてしまう稽古法だ。

本論文では、モスクワ芸術座の創立者であり、有名な俳優、演出家でもあったスタニスラフスキーがスタニスラフスキーシステムを生み出すまでの経緯から、システムの意義について考察する。又、論者が2015年12月20日に開催した「演劇ワークショップと理論」を通して生み出された効果についても論文を通して触れた。

第1章では、スタニスラフスキーの生涯を辿りながらシステムが生み出されるまでの経緯について考察している。スタニスラフスキーが残した戯曲の読み方、過去の体験を呼び起こし、想像力を働かせ、身体的行動へと繋げる稽古法を理解しやすいように解りやすく解説する。

第2章では、身体的行動の方法を用いた稽古法を論じるにあたり、スタニスラフスキーがシステムをはじめ稽古で適用した1909年のイワン・ツルゲーネフの『村のひと月』の稽古法について取り上げている。その中で、役の感情を理解する為に台本にスタニスラフスキーオリジナルの表記法が使われたことについても触れた。

第3章では、私の今までの演劇経験を振り返りつつ、スタニスラフスキーとの類似点について論じた。又、2015年12月20日に一般の方を対象に行った演劇のワークショップとスタニスラフスキーの身体的行動の方法論の講義について、開催者として自身の体験を含み書かれている。幅広い年齢層、教育演技を受けた経験がない参加者が集まったが、参加者にとって普段使わない場所の身体や脳を刺激することで、コミュニケーション能力や表現力の向上に効果があることが考察された。

最終章では、論者が今後俳優活動を続けていくにあたり、役に対する考え方が広がり、今後の活動に活かせる重要な

ヒントになったことは間違いない。又、『演劇ワークショップと理論』を行ったことで初めてスタニスラフスキーシステムに触れる人に対して理解を深め、今後の演劇を見直すきっかけになったことも間違いない。この経験が僅かながらスタニスラフスキーシステムを広める第一歩となったことは確かだろう。

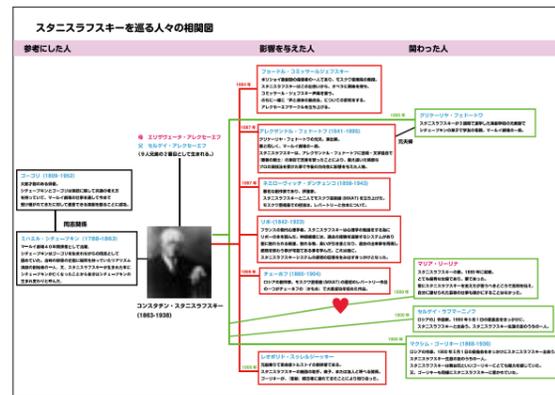


図1:スタニスラフスキーを巡る人々の相関図

演劇ワークショップと理論  
DORAMAWORKSHOP & THEORY  
2015/12/20  
20,December,2015



山のぬし / YAMA NO NUSHI

映像作品 16分 / Video work 16min

制作では、16分間の映像作品を作り上げた。制作のきっかけは、小さい頃遊んだ思い出の場所をもう一度訪れた事からはじまる。思い出を辿り進んでいくと、私はその日そこでたくさんの素敵なものたちと出会う事になる。私は今まで役者として舞台やカメラの前で演じてきたが、今回の映像制作を通して役者として鍛えてきた身体性を活かせる作品を作り上げた。

